第１回　ASCON D-SAP（持続可能な農業政策を考える会）開催報告

〈ASCON Dialogue-Sustainable Agricultural Policy〉

2026 年 2 月 24 日

（一社）消費者市民社会をつくる会・ASCON
代表理事　阿南　久

【開催日時】2026 年２月５日(木)17:00～19:00
【場所】 食品衛生センター6F　会議室
【参加】 13 名（2.5 時点でのご登録者：18 名）

【議　事】 司会進行；阿南　　記録；I さん

1）開会のご挨拶（趣旨説明）：結成の呼びかけメッセージより　阿南　久

米の異常な価格高騰により、市場は「令和の米騒動」と言われる混乱が続いています。緊迫した世界情勢の中で、また、気候変動により水産物についても漁業資源の枯渇が深刻化する中で、食料安全保障はどう確保されるのか、食料の輸入大国日本に暮らす多くの消費者の関心も高まっています。こうした状況を、普段の暮らしの観点から、冷静に見つめ、情報を集め、これからの農業政策について学び、考える会を結成したいと存じます。決して専門家・アカデミアの講義を聴くだけの会にはしたくありません。

2）参加者の自己紹介・問題意識に関する発言およびフリーディスカッション

＊ 農林水産省官僚・農業従事者とは日頃、交流しているが、一般の消費者が今後の農業について、どのように考えているか直に知りたく参加した。米国のブルックサイド研究所に土壌の処方箋をコンサル依頼している。（B）

＊ お弁当製造会社。弁当はお米の使用比率が高く、昨今の米価高騰は経営に影響しており、会社として関心が高い。また品質保証に従事する上で、農業政策など一段高い議論など新たな視点を得るために参加した。

農業の持続性は、国土防衛、食料安全保障にも関わる。

⇒ 土地など海外資本が入ってきている。後継者の育成も必要

食文化という観点で見た際に、食文化は、その国をまとめる力があると思う。日本という国の文化を継承していくうえで、お米の文化は国の根幹を左右する課題ともいえると考える。（T）

＊ 静岡県が地盤の環境全般の検査センター。ジェネリック医薬品、食品検査なども実施。
食品は原則、自主検査であるが、環境関係は行政指示による場合が多い。環境分野のトレンドが食品分野にくる場合が多く、昨今、話題になっている環境由来の PFOS/PFOA も将来、食品に波及する可能性がある。今回、問題提起したい案件もあり、参加した。（S）

＊ 横浜市で炊飯・米飯加工事業。異常な相場観、今年はもち米のものがない状況で、農林水産省のお話について興味がある。減反政策は売る気のない政策。マーケットは国内だけでない。なぜ減反するのか消費者目線で納得いかない。（A）

＊ 産学連携・地域創生などのオープンイノベーションに携わっている中で、昨今、高齢化対策、温暖化対策が多くなってきており、農業の持続性に関心があり、参加した。（I）

＊　生鮮食品の機能性表示をサポート。最近、制度がますます厳しくなり、生鮮食品の届出が激減している。農作物の規格外品などの未利用資源をどう活用するかもスコープ。（N）

＊　野菜の販売に関わっている。農業従事者の高齢化、食品表示に関心がある。
農水省に増産するよう提案したが、農水省は増産する気がない。
　⇒　小麦を輸入しないといけない事情がある（米食より、パン食が時短などメリット）
　コメの栄養面でのメリットを啓発して欲しい（価格だけでなく、生存に関わる事を説明）
アキタコマチＲについては、表示の面で消費者に対しかくしていないと思われる事が必要。
Cd 吸収抑制コメについては、岡山大学がインド由来のコメと 10 年にわたる品種改良により開発した例もある。ただ、ゲノム編集技術を活用し、開発期間短縮を図ってしまう。
欧米の栄養表示は、Mn、Zn などミネラル含量など詳しく記載。国内では、記載がないので、コメ業者も栄養学的な面で気づいていない。
　⇒　日本は、医者や消費者なども栄養表示のリテラシーが低い。（NM）

＊　ヤンマーでトラクターの設計などに従事。ヤンマーとしては、モノをつくるだけでなく、資源循環の施策も重要で機構を作り、研究助成。昨年 4 月から公益化。
一つ目は、高齢化。自身が 65 歳で退職し、地方に帰ると若手と呼ばれる。後継者不足。
二つ目は、肥料の問題。輸入が多く、国産化の必要性。残渣の活用など資源循環の施策が必要。
（Y）

＊　元三菱商事で、化学肥料・化学農薬を扱っていた。世界の人口増加に対応する為、食糧供給に貢献している自負があった。しかし、最近は、バイオスティミュラント、水素の農業など、化学農法の代替を検討する必要性を感じている。
日本の土壌は、Mn、Zn、Si など足りないが、日本人は、古来より経験で稲作を行ってきた。
しかし、近年、大量生産・消費の時代となり、均一の肥料で大量生産した方が、利益が上がったが、バランスも崩れ弊害も出ている。持続的な農業を維持するためにもバランスのとれた農業に戻す必要がある。（U）

＊　お米で健康推進部会の部会は 6 年活動している。メインは（一社）日本健康食育協会の代表理事。食材そのものが重要であり、生産・流通にも関わっている。食・健康の消費者コミュニケーションが専門。米の社会問題について情報発信。大阪万博で農水省関連の講演を通じ、消費者とのギャップを感じた。
　現在、コメの国内消費量が減少しているので足りているようにみえるが、輸入に依存している小麦がストップすると、全く足りない状況となるので、農水省も需給調整の考えでなく、コメの消費拡大の施策が必要（食料安全保障上、コメを選んでもらう必要がある）
　日本人はコメがあるのは当たり前の認識。農水省も生産者がいなくなるリスクを認識して欲しい。消費者が守る意識がないと当たり前の生活でなくなる。
　コメ業者もマーケティング戦略がなかった（これまでは売れて当たり前の認識）。
　　⇒　健康、生きるためにコメが重要である事をアピールする必要
　アキタコマチＲ：輸出促進のために Cd 吸収を抑制し、Cd 基準をクリアする事は必須。しかし、Mn（マンガン）は糖質代謝に必須の元素であり、Mn 含量が少ないコメは、血糖値上昇、糖尿病リスク増加など健康リスクが高まる。消費者が選択できるよう食品表示が重要となる。（K）

＊　食品などの容器・包材メーカー。中身としては食品の割合が多いが、その食品が大きく変動してきている（例：従来の魚種が変わってきている）

また、自社で国内ワイン製造しているが、温暖化によりブドウ収穫の年変動が大きくなっていて、農業が大変な状況になっているのを感じ、国内で食品生産をどう維持するかをテーマにし、今後の農業を考えるために参加。（NA）

B 氏よりプレゼン・質疑応答

B 氏より、おコメの需要と価格に関して、–「令和の米騒動」をめぐってー についてプレゼンいただき、参加メンバーでディスカッションしました。
K 氏より、
・これまで国産米＝おいしい　のイメージであったが、カルロース米の輸入増大により、海外産コメも意外においしいとの認識が広がり、輸入コメでも価格が安い方がいい消費者層が出てきている。
⇒　国内農業の持続性を考える上で消費者教育が重要となる。

3）その他（今後の進め方など）

・次回以降、サステナビリティの課題、食品表示の課題、高齢化・後継者問題などをテーマに議論する。
⇒　テーマを絞り込まず、雑談的に行い、より自由な意見やアイデアが出るようにして”対話“を促進する。
・したがって、今回のように講師をよばず、参加メンバーが中心になって議論（シンポジウム）する形で進める。
・また、「報告書」（概要）は、お名前等は伏せて、ASCON ホームページで公表する。
・次回は、3/30（月）に開催する。

2 月 5 日の議論の様子

以上
写真と文責は阿南　久